

静岡県言語・聴覚・発達障害研究

第58号

(令和8年3月)



静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会



【 目次 】

◇ あいさつ	会長 静岡市立番町小学校長 石原 鉄也	1
1 静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会 内容		2
2 定例研修会 講演会		3
3 分科会		
【第1回】		
構音障害 実践発表		4
「ICTを使った構音指導～グーグルワークスペースを使って～」	発表者 吉田町自彊小学校 渡邊 威	
言語発達遅滞 事例検討		5
「言葉が全体的にはっきりしない園児に関する検討」	事例提供者 富士宮市立田子浦幼稚園 佐野景子	
吃音 (東海四県大会 発表)		6
「番町小通級指導教室による吃音指導の取り組み」	発表者 静岡市立番町小学校 池谷 元・山口 舞・齊藤夏澄・青木教美・高木美仁	
学習 事例検討		12
「学習のレディネス～幼児言語教室だからできること～」	事例提供者 静岡市特別支援教育センター内幼児言語教室 亘 裕美・池田式部・杉井知子・山梨夏織	
行動 事例検討		17
「指導計画の立て方を考える」	事例提供者 浜松市立気賀小学校 小出千恵	
【第2回】		
聞く 情報交換		19
「『聴く』ことに課題をもつ子の指導・支援のあり方について」	情報提供者 伊豆の国市立葎山小学校 鈴木千晶	
話す 事例検討		24
「『相手に分かりやすく話す』という意識を育てる支援・指導」	事例提供者 浜松市立追分小学校 関口由美	
「言語発達遅滞の子どもの話す力を向上させるための支援・指導について」	事例提供者 浜松市立二俣小学校 鈴木沙希	
読み書き 情報交換		25
「書くことの苦手な児童・生徒の支援について」	情報提供者 静岡市立番町小学校 織部雄大	
コミュニケーション 情報交換		26
「コミュニケーション指導に役に立つ教材・教具・指導法」	情報提供者 掛川市立中央小学校 森下直子	
連携 事例検討		27
「個別の支援計画・指導計画を活用した小中高の連携について」	事例提供者 静岡市立大里中学校 河村佳美	
思春期 事例検討		27
「中学校のLD（学習障害）について」	事例提供者 焼津市立焼津中学校 加藤 誠	
4 各地区研修報告		
静岡地区		29
静岡地区		34
静岡地区		37
浜松地区		41
◇ 編集後記	研究部	47

あ い さ つ

静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会
会長 石原鉄也

Society 5.0の時代を迎え、子どもたちを取り巻く環境はかつてないほどの速さで、大きく変わってきました。幼少期の遊び、親子の関係、周りの人の関わり方が著しく変化し、そのことが子どもたちの育ちに大きく影響しています。

令和7年9月、文部科学省中央教育審議会教育課程企画特別部会から、次期指導要領における教育の方向性が、論点整理として公表されました。その中の特別支援教育では、通級に関わる提案が大部分を占め、ますますその役割が大きくなっていることがうかがえました。主なものを4点あげると①インクルーシブ教育推進のため通常学級と特別支援学級を繋ぐ重要なポストとして、通級を位置付ける②『障害のある子どもたちの状態等に応じたきめ細かな指導の実現を図る』日頃の通級と同様のねらい③障害による困難の改善と克服を目的とする指導の充実を図る観点から自立活動を柱にする④通級において障害の状況等を踏まえ特に必要がある場合には、各教科の指導を可能とすべき。また、指導時間数や習得単位数の上限を見直すとまとめられています。このように、文部科学省がいかに通級を重要と考えているかが伝わってきます。

さて、静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会以下、静言研においては、本年度も自らの学びを自らの手でという私たちの理念のもとに定例研修会や地区講習会等の研修会や会議を開催し、専門性の向上と指導環境の改善に努めてきました。特に5月と12月の定例研では、対面式とオンラインを併用する方式が定着し、いずれも300人あまりの会員の参加があり、実り多い研究会を開催できました。特に第2回定例研では、静言研を長きにわたり支えてくださった静岡大学教育学部教授の大塚玲様の講話を拝聴させていただきました。改めて本会の存在意義の大きさを感じると共に、大塚先生のご尽力に感謝と敬意を表します。

通級指導教室、幼児言語教室は、日頃の皆様の努力のおかげで、通ってくる子どもたちの自立に向けて、障害のある子どもと障害のない子ども、子どもと保護者、保護者と学校や園のつなぎ役として、着実に成果を上げ信頼を得ています。こうした皆様の地道な取り組みを有難く思います。さらに、今後の教育において、ますますその責務は重くなりますが、子どもたちのために何が必要で何ができるかを考え、日々精進していきましょう。

最後に、本年度の定例研担当の浜松地区、静西地区、各専門部、各地区事務局、県事務局、本会の様々な事業の運営に携わった方々と静言研を支えてくださる静岡県ことばと心を育む会、静岡県身体障害者福祉会、静岡県健康福祉部、静岡県教育委員会の皆様に心より感謝申し上げます、あいさつとさせていただきます。

令和7年度 静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会 内容

1 定例研修会

(1) 第1回定例研修会

令和7年5月16日(金) 会場：浜松市福祉交流センター

講演：対面とZoomによる配信

分科会：対面での実施

「構音障害」「言語発達遅滞」「吃音」「学習」「行動」

(2) 第2回定例研修会

令和7年12月12日(金)

会場：牧之原市相良総合センター「い〜ら」

講演：対面とZoomによる配信

分科会：対面での実施

「話す」「聞く」「読み書き」「コミュニケーション」「連携」

「思春期」

2 新任者研修会

各地区にて実施

詳細は各地区研修報告参照

3 県内各地区での研修会

各地区での状況に合わせて実施

詳細は各地区研修報告参照

4 研究会誌作成

5 会報『えがお』発行

静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会ホームページに掲載

令和7年度 定例研修会 講演会

【第1回】

令和7年5月16日（金）

会場 浜松市福祉交流センター

演題 「通級指導教室の役割と担当者の専門性を考える」

講師 谷戸 諒太 先生

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 研究企画部 主任研究員

通級指導教室に通う児童は、増加傾向にある。多様な教育的ニーズを持つ児童もいて、担当者はそれらの児童に対応する専門性が求められている。専門性向上のためには、様々な研修が必要であること、経験豊富な担当者やS Tなどの専門家から学ぶこと等が考えられる。

また、担当者には ①難聴や言語障害や子供の発達に関わる専門性 ②保護者や通常の学級等との連携・教育相談の力量、子供の暮らしや学習全体を支える視点、個々のニーズに応じる特別支援教育の視点における専門性、が求められる。

担当者は学びに関する高度専門家となり、教職生涯を通して探求心を持って主体的に学び続けることが求められる。そして、専門職の根底にある探求心こそが常に新たな息吹を与えるエネルギーの源泉となる。

【第2回】

令和7年12月12日（金）

会場 牧之原市相良総合センター「い～ら」

演題 「読み書きに困難のある児童生徒に対する通級指導教室での支援は
通常学級でどう生きるか ー実証調査の結果からー」

講師 大塚 玲 先生（静岡大学 教育学部 教授）

小・中学校において読み書きに著しい困難を示す児童生徒が3.5%いる。二次被害を防ぐために保護者・学校・医療機関が連携して早期発見・支援をし、ICTや合理的配慮を導入することが重要である。また、幼児期の言語発達がその後の文字習得に影響するため、遊びを通して音韻認識を育てることが大切になる。通級指導教員を対象とした調査からは、様々な実態に加え、配慮によって困り感が軽減した児童生徒が約70%いることが分かった。困難を早期に発見し、適切な支援につなげるためには、医療機関や家庭、学校が手を取り合うことが欠かせない。

通級による指導の場では、単に苦手なことを無理に練習させるのではなく、新しい道具も使いこなしながら「これならできる！」という自信を持って学習に参加できる環境を子どもたちに提供していくことが必要である。「自分はダメだ」と自信を失ってしまう二次被害を防ぐことが、私たち担当者の重要な役割である。

※第1回、第2回とも対面での実施に加え、Zoomでの配信も実施した。

会場に来ることができない会員でも講演を聞くことができ、研修の機会が広がった。

編集後記

令和7年度の終わりにあたり、本研究会の活動を振り返れば、今年度も私たちは「自らの学びを自らの手で」という静言研の揺るぎない理念のもと、共に歩みを進めてきました。静岡の子どもたちが抱える言葉や発達課題に対して、何ができるのか、その問いに向き合い続けた1年であったと感じます。

そして、第2回定例研の講演では、静言研顧問として長きにわたり本会を支え導いてくださった静岡大学教育学部教授の大塚玲先生が、今年度でご勇退されるのを記念して講演をしていただきました。大塚先生がこれまで積み上げてこられた研究と、現場に寄り添う温かな眼差しは、静言研の大きな財産です。先生のこれまでの多大なるご尽力に対し、改めて最大級の感謝と敬意を表します。先生に教えていただいた「子どもを理解しようとする真摯な姿勢」を私たちはこれからも大切に守り続けていこうと思います。

平成28年度からスタートした通級指導担当教員の基礎定数化が、令和8年度にいよいよ完了し、基礎定数に完全移行します。通級による指導が学校教育の「不可欠な柱」として広く認められてきていることは通級指導担当者にとって大きな支えです。しかし、制度が整う今こそ、私たちの真の専門性が問われることとなります。

私たちは変化を恐れず、目の前の一人ひとりと真摯に向き合い、柔軟に学び続けていかなければなりません。本年度の活動が、会員の皆様にとって次なる歩みへの確かな財産となることを願っております。

最後になりますが、運営にご尽力いただいた役員の皆様、そして日々教室で子どもたちを支え続ける全会員の皆様に深く感謝申し上げます。今後とも変わらぬ御支援と御協力をお願いいたします。

研究部 白井有希乃、関口由美、谷野美香

